

The utility of oral moisture measurement for the diagnosis of Sjögren's syndrome: Its potential application as a diagnostic criterion

荒木, 淳

<https://hdl.handle.net/2324/7329447>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (歯学), 課程博士
バージョン :

権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



氏 名 : 荒木 淳

論 文 名 : The utility of oral moisture measurement for the diagnosis of Sjögren's syndrome: Its potential application as a diagnostic criterion

(シェーグレン症候群の診断における口腔水分計の有用性-診断基準への応用に向けて-)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

シェーグレン症候群 (SS) の診断基準には、口腔検査の 1 つとして唾液分泌量が採用されている。本邦では刺激時唾液分泌量 (ガムテスト、サクソンテスト) が用いられ、欧米では安静時唾液分泌量 (吐唾法) が用いられている。しかし、いずれの評価法も時間を要することや、唾液分泌量の日内変動により再現性に欠ける可能性が指摘されている。近年、「口腔機能低下症」の診断基準の評価項目に「口腔水分計」が採用されている。口腔水分計は口腔粘膜水分量を 2 秒で測定できることから、咀嚼が困難な症例や全身状態が不良な症例にも使用可能である。そこで本研究は、唾液分泌量と口腔粘膜水分量を同時に測定することで、両者の相関を検討し、SS の診断における口腔水分計の有用性を検証した。

対象は SS 患者 40 例 (女性: 38 例、男性: 2 例) と、放射線治療歴や唾液分泌に影響を及ぼす可能性のある薬剤の使用がない健常者 29 例 (女性: 28 例、男性: 1 例) とした。刺激時唾液分泌量の測定には、ガムテストおよびサクソンテストを用いて、安静時唾液分泌量の測定には吐唾法を用いた。口腔粘膜水分量は、口腔水分計 (ムーカス®) を使用して、舌背と頬粘膜で測定した。さらに、自覚的乾燥症状 (口腔乾燥感、唾液分泌量の低下、摂食時飲水、口腔内疼痛、嚥下困難感、味覚異常) の程度の把握には visual analog scale (VAS) を用いた。

舌背および頬粘膜における口腔粘膜水分量は、健常者と比較して、SS 患者で有意に低かった ($p < 0.01$)。また、唾液分泌量 (特に吐唾法) と口腔粘膜水分量は、舌背 ($p < 0.0001$) および頬粘膜 ($p < 0.0111$) においても強い正の相関を認めた。さらに、SS の診断における口腔粘膜水分量の診断能 (感度・特異度・正診率) は、舌背についてはそれぞれ 92.5%、68.9%、82.6%であり、頬粘膜については 70.0%、82.8%、73.9%であった。また、舌背における口腔粘膜水分量は、二次的な自覚的乾燥症状 (口腔内疼痛、嚥下困難感、味覚異常) と中程度の負の相関を認めた。一方、直接的な自覚的乾燥症状 (口腔乾燥感、唾液分泌量の低下) とは弱い負の相関を示した。

口腔粘膜水分量は、安静時唾液分泌量および二次的な自覚的乾燥症状と相関することからも、長期的な口腔内の乾燥状態を反映することが考えられ、SS の診断基準の項目の 1 つとなり得る可能性が示唆された。